

西周『致知啓蒙』を読む（上）

鈴木 修 一

1

『致知啓蒙』は西周が刊行した「日本ではじめて試みられた形式論理学の解説書」⁽¹⁾であり、その題名は現代風に言えば、「論理学入門」とでも言うべきものである。西はこれに先立って、オランダ留学中に受けた S. Vissering の国際公法講義の翻訳である『官版萬国公法』『和蘭畢酒林氏萬国公法』（共に慶應4年刊）、Philosophy の訳語として「哲学」⁽²⁾という語が日本で最初に出ている、彼の哲学論、認識論とでも言える『百一新論』（明治7年刊）を刊行しており、これらに次ぐ第三番目の著書として出版された。⁽³⁾

前掲「日本ではじめて試みられた」云々は、例えば、当時の新聞広告で「本邦未曾有の珍書」⁽⁴⁾などと宣伝されていることから、そうであったのであろう。

さて、著書の表題であるが、「啓蒙」とは、そのことばの文字通りの意味を解して、蒙を啓く、つまり紹介解説による入門くらの意味であろう。「啓蒙」ということばの詮索をするのは、この拙論では措くとしても、少なくとも、これが例えば、カントの言うような意味で使われているのではないことは確かであろう。⁽⁵⁾ 事実、第一章の末尾でこう言っている。「今、此書ハ、旧キ致知学ノ、合率ノ諸法ノミヲ挙ケ、聊カ初ヒ學ヒノ楷^{カケハン}梯トナシ」（393頁）。つまり、この書は「初ヒ學ヒノ楷梯」であり、入門書であ

る、と断っているのである。

表題前部の「致知」とは、書の冒頭で言っているように「ロジカ」の訳語である。(390頁)最初は「学原」と訳していたようであるが。(390頁)⁽⁶⁾「致知」とは『大学』の「格物致知」の「致知」をとったものである。「マツロジカテフヲ、支那ノ語ニ翻シテ、致知学ト名ケツ」(391頁)とある。ただし語は借りたが、それは『大学』で言う「物ニ格リヌレハ、即チ知ハ致リヌ」というように、格物の後に来る「致知」ではなく、「格物ノマヘニ、致知ノ術ヲ先ニスルトハ、少シク事カハリヌレト、……」(391頁)と断っているように、その「知」のレベルの相異を認めた上での借用である。

以上のことから、『致知啓蒙』とは『論理学入門』と言ってよかろうと思う。

それでは、ロジックの訳語として論理学という語がいつ頃から用いられるようになったのか、という問題が残るが、正直のところ筆者にはわからない。わかっているのは、例のチャンブルの INFORMATION OF THE PEOPLE の翻訳が文部省により企てられ、明治六年七月から『百工応用化学編』を初めに刊行され始めたときの予告では『明理学』となっていたが、十一年十一月に実際に刊行されたときには『論理学』となっている。また、明治8年1月にその第1号を刊行した『共存雑法』の、39号(明治12年9月)から、40、41、44、46、49、51、53、55、56号(13年2月)に10回に渡って連載された菊池大麓の「論理学説約」がある。⁽⁸⁾しかし、明治14年4月に刊行された、井上哲次郎が中心的に関わっている『哲学字彙』⁽⁹⁾には「論法」との訳が対応させられていて、『増補改訂哲学字彙』(明治17年5月)になっても、そのままであり、明治45年1月の『英佛獨和哲学字彙』になって、「論法」と並記されるかたちで「論理学」ということばが現れている。

2

さて、いよいよ、その内容だが、さし当り、その概略と、それ以前の、注(6)で触れた稿本2種との異同に触れておこう。刊本は、第一章 学原大旨に始まり第十二章 同異表決に終わる第一巻と、第十三章、命題諸式に始まり、第二十五章 帰納開端に終わる第二巻から構成されている。『五原新範』は、刊本の第一巻部分のみが残されていて、語句には、刊本との相異が若干散見され、刊本に向けての原語からの用語の翻訳の苦勞が偲ばれるものの、刊本が漢字カタカナまじり文であるのに対して、漢字ひらがなまじり文（と言っても漢字の使用頻度がかなり低く、そのお陰で(?)、刊本の漢字の読みが大いに助けられるという利点がある。）で、内容的には大差ないと言える。これに対し、最初の稿本『学原稿本』は章立てもいくつか異なり、用語の訳語としては、大差とは言えないにしても、かなり後の二本とは異なる。文は漢字ひらがなまじり文である。個別的な相異は後に内容の具体的検討の際に触れる。

刊本に目次はないが、以下にその章立てを掲げる。

第一章 原学大旨	第七章 鉤念引考
第二章 文学関渉	第八章 立極命題
第三章 学術分岐	第九章 主属彙類
第四章 原由学術	第十章 歴上套挿
第五章 念区概括	第十一章 外延内包
第六章 命名定義	第十二章 同異表決

以上第一巻

第十三章 命題諸式
 第十四章 対偶互証
 第十五章 反対互証
 第十六章 転換互証
 第十七章 演題四図
 第十八章 首図定則
 第十九章 演題通則

第二十章 二十四軌
 第二十一章 化形還元
 第二十二章 拗格演題
 第二十三章 眞偽易混
 第二十四章 模範諸種
 第二十五章 帰納開端

以上第二卷

この章立てを見てすぐ気がつくことは、現在論理学（あるいは哲学）で使用されている用語は、命名、定義、命題、外延、内包、眞偽、還元、帰納、くらいのものであるということであり、それが多いか少ないかは、意見のわかれるところであろう。

この章立ては必らずしもそうではないが、巻のわけ方は、西が断っているように（393頁）J・ステュアート・ミルのSystem of logic, ratiocinative and inductiveのわけ方（全体が、Book I～Book VIから成っている、そのうちのBook I, Book IIに対応している）に見合っている。⁽¹⁰⁾

ここで大きな疑問が残るが、それは、論理学入門の書とは言え、西がミルに大きな関心を抱いたのは、ミルの帰納法に関してであるのに、⁽¹¹⁾そして、ミルの『論理学大系』の中心はBook IIIの「帰納法」（事実、この巻だけで全体659頁のうちの222頁分を占める）にあるはずなのに、なぜそれを省略したのだろうか。

西がオランダ留学中に最大の関心をもって学んだのは、よく知られているように、コントの実証哲学とミルの帰納法に基く哲学であった。明治6年6月頃に完成した『生性發蘊』にこう述べられている。「而古今東西儒學哲学ノ流伝、性里ノ論説ハ、……法ノ塙アウゴスト胡斯、坤度力実理學ニ淵源シ、

近日有名ノ大家、英ノ約翰、士低化多、美爾カ歸納致知ノ方法二本イテ、始メナント思フナリ。」(36頁)。しかし、この書(結局刊行されなかったが)も、そう述べながら、全体が二篇から成る、その第一篇は、「源二折リ宗ヲ開ク」と題され、Lewesの *The Biographical History of Philosophy, from its origin in Greece down to present day, 1857.* に依拠した哲学史的記述であり、「坤度氏ノ生体學」と題された第二篇は、同じ著者の *Comte's Philosophy of the Sciences: being an Exposition of the principles of the Cours de Philosophie Positive of Auguste Comte* の section XVI-XXの西なりの解釈をまじえた抄訳であって、ミルの歸納法についてはほとんど触れていない。

先に省略したと言ったが、第_五章は、なるほど、「歸納開端」と題して、「……新シキ致知学ノ、歸納ノ法ハ、固ヨリ約翰・士低亞多・彌爾氏ノ致知軌範ニ、讓ラムト思ヒヌルニ」と断って、「サハイへ、猶一、通り論ラヒテ、学者ニ、其緒ヲ示サテハ、得モ已ムマシキコトアルナリ」とそのアウトラインだけを示して、「学者ソレ之ヲ本書ニ講究セヨ」(448頁～450頁)で終わっていて、ミルの「本書」における歸納法の位置付けとは全く異なっている。少なくともミルの「本書」からすれば、この歸納法こそが、論理学の中心であり、事実、古い致知学である形式論理学は、その領域が「以前に知られていた真理に基く推理からなる、われわれの知識部分に制限されなければならない」と述べられている。⁽¹¹⁾

従って、先に引用したように、西はミルの歸納法に基く哲学を高く評価していたのだから、いづれ後になって、第三卷以降も書くつもりでいたのかもしれないと思われる。

ただし、古い致知学である形式論理学について、西独自の見解も示されていて、西の意図は、それに基いてのこの書の執筆の動機と解した方がよいのかもしれない、とも思う。即ち、「……学ヒノ道ニ、心ヲ寄ナム者ハ、

何ノ学ヒニモアレ、得モ缺マシキ、手解キノ學ニテ、中ニモ、形而上ノ論
 ラヒニツキテ、此学ヒノナカリセハ、数ノ学ヒナクシテ、格物ノ學ヲ、事
 トスルカ如クナルヘシ」(391頁)と述べて、西の当面の最大課題であつ
 た形而上学においては、格物の学において、数学が不可欠であるように、
 この致知学で十分とは言えないにしても、差し支えないと判断したのかも
 しれない、と推測される。

3

なお少し、刊本と二種の稿本、特に『学原稿本』との関係に触れておこう。

第一章の題であるが、『学原稿本』では「学原大旨」、『五原新範』では
 「学原大旨」、(ただし、原学と語を入れ替える傍注)、『致知啓蒙』では
 「原学大旨」となっている。「学原」とは、五原、即ち、学原(ロジック)、
 性原(プシコロジック)、教原(エチック)、政原(ドロワナチュラール、
 ヒロソヒーヂェドロワ)、治原(エコノミーポリチック)⁽¹²⁾という(今様
 に言い替えれば、順に、論理学、心理学、倫理学、自然法/法哲学、政治
 経済学)、五つの基本的学問の一つとされており、第一章は、その学原(=
 論理学)の大旨を記述するという章である。ところが『五原新範』では「原
 学」と語順を逆にし、刊本ではそれを踏襲していて、意味不明となってし
 まっている。

さらに疑問として残るのは、そもそもこれら二種の稿本を書いたとき、
 西は単に論理学書を著そうとしたのではなく、上に述べた五つの基本的学
 問を体系的に著そうとしたのではないか、と思える点である。『学原稿本』
 には、「五原新則 第壹卷 学原第一篇」と記されており、その第一篇の
 稿本のみが残されているので、全集の編者大久保は「学原稿本」としてい
 るのであろう。『五原新範』は最初「五原新範 第一卷 学原第一篇」と
 あったのが「致知範 原学門」と訂正されていて、先に触れたように、致

知ということばが現れてくる。以上のことを考え合わせると、『五原新範』の浄書後、校合前までは、西は「五原」を含む体系的書物の構想をもっていたのであろう、という推測が成り立つ、と思えるが、いかがであろうか。

ところで、話を「致知」に戻すと、『学原稿本』の終りの二章「命題諸式」「同上余説」の部分（これは『致知啓蒙』の第二卷第十三章に該当するが）で、命題の三式について触れて、すべての命題は六つに集約されると述べるが、その集約の仕方について、「猶約^{カタ}法^ノ事につきて種々^ヲの論ふへきことあれどそは演式^ノの後に其概略^ヲを挙て詳き事は致知稿義を著はさむを待ちね」（339頁）と記している。つまりこの稿本とは別に、もっと詳細な論理学書『致知稿義』を書くつもりでいたらしい。

しかし、『致知啓蒙』を出版したときには、その意図は全くなくなっていたらしく、第^{十三}章の末尾で、『学原稿本』同様命題三式について触れた後、「尚約メ法ノコトニ就テ、種々論ラフヘキコトアレト、ソハ、口授ナラテハ、悉スヘクモアラス、精シキコトハ、本ツ文ニ譲リテ、……」（418頁）と記している。つまり、文章で書けば詳細に論じ長くなりすぎて、この入門書ではそれは無理だから、ミルの原書を参照されたい、と言っているのだが、「精シキコトハ、本ツ文ニ譲リテ」と記すときの西の気持ちはいかばかりであったろうか。時代は現代と違い、現代においては、「詳細は原書を参照されたい」と入門書の類にあってもそれほど無理難題をふっかけたことにはならないと思われるが、当時未知の学問であった論理学の入門書を、これを読んで理解することが相当に難しかったはずであり、しかも原書を入手して参照すること自体、そしてその英語を解することの困難さに思いを致すなら、「精シキコトハ、本ツ文ニ譲リテ」は読者を冷淡に突き放すこと以外のなにものをも意味しない、と言えるであろう。⁽¹³⁾

『致知啓蒙』本文に入る前、最後に西の、翻訳の難しさについて語っている箇所に触れて、特に哲学という学問の日本への移植の難しさ（これ

は形を変えて現在におけるわれわれの西洋理解の難しさとなっている、と言っても過言ではなからう。)を西が充分自覚しているということ、それにも拘わらず、先駆者として敢えてそれを試みようという西の姿勢をみておこう。第六章で、定義の例として「仁」について触れながら、こう記している。

「又外國ノ語ハ、之ヲ翻ヘスコト、イト難シ、ソハ想像上ニ渉ル言ハ、多クハ、彼ト爰ト、念ノ上ニテ異ハリ、又正^{ナリ}シキ形ノアル者ニテハ、其形チニテ異ハリテ、譬ヘハ、仁テフ語ナト、爰ニ翻ヘサム語ナク、鼎テフ者、爰ノ金鍋トハ、異ナルカ如シ、学者能^{コトハ}心セヨカシ、」(401頁)

先ず端的に外国語を日本語に翻訳することは大変難しいと言う。恐らくこれは現代のわれわれには想像もつかない位難しかったのだと思う。「想像上ニ渉ル言」とは、ここでは言いかえれば、抽象的な言語と言ってもよいだろうし、特に西にとっては、性理学上の、つまり哲学上の、あるいは「形而上」のことば、と言ってもよいだろう。と言うのは、「想像力」は西の解したところでは、「……性理学にて、イト重キ司サヲ勤メ」(398頁)る能力であり、想念(=概念を創る)の一種であって、それはこの能力によって創られた「正^{ナリ}シキ形ナクシテ、其性質ノミヲ、指シタル」ことばであるからである。確かに概念がことなるどころか、そういう概念すらないことの多いことばの翻訳は現在のわれわれにも、その困難さの点で、同様である。

しかし、西によれば、続けて言われるように、「正^{ナリ}シキ形ノアル者」についても同様であるとされる。しかし、これについては、現物ないしは画像が与えられ、説明されれば解決のつくことであって、前者とは原理上の困難さが異なることは、西は言外に了解していたのではないか。

さらにもう一ヶ所、翻訳上の問題ではないけれど、彼我のことばの違いに触れている。

「……又主位(=主語)ノ下ノ、ハ文字ハ、佗シ国ノ言ニハ、カカルテニヨハハナケレト、我国ノ言語ニテ、正例ニテハ、之ヲ用フルヲ、当レリトス、ソハ、區別ノ助辞トテ、彼ハ斯^{シカシカ}々ナリトモ、此ハ然ナリト、定ムル心ニテ、イトカラアリ、正例ニテハ、佗シテニヨハヲ、通ハシ用フヘキニアラス」(404頁)。

4

以下、『致知啓蒙』の本文に即して、西による本邦最初と言われる形式論理学の紹介解説を見ていく。⁽¹⁴⁾

第一章において、上述のように、稿本で「学原」とされていたのが「原学」となっているが、これも Logic の訳であることに変わりはないと思われるが、その「原学大旨」で、論理学の意義について記した次に、「旧キ致知学」の歴史を見事に簡略に描き出している。「此学ヒ、歐羅巴ニテハ、イト旧クヨリ、伝ハリツルコトニテ、カノ希臘ノ昔シ、^{アリストットル}亞立斯度徳テフ、名高キ^{モノシリ}博識ニ創マリテ、之ヲロジカノ父トナム云ヒヌル」と始める。アリストテレスにおいて「デアレクチック」と呼ばれて、ほぼ「旧キ致知学」は大概形成されていたが、「ストイクテフ学派」の時から「ロジカ」と呼ばれるようになり、「スコラスチク」の時にほぼ完成して「輓近ノ新哲学」へと伝わってきた、と。(391～2頁)⁽¹⁵⁾

そして、「ロジカ」の語は、ギリシャ語の「ロゴス、^{コトハ}語」「レゲイン、^{コトハ}話ステフ言」に由来すると説明し、「デアレクチック」は「デア 共ニ」「レゲイン」の合成語としての成立を説明することにより、「初メナルハ、語ヲ使フテフ^{ココロ}意、後ナルハ、人ト話ステフ意ヨリ、物ノ理リヲ、論ラフ意ニ、

移リタリ、ソレ故ニ旧クヨリ、ロジカテフ語ノ、定義トテ、論解ノ術トソ、云ヒヌル」と意味の変遷について述べる。そしてこの「論弁ノ術」とはいかなる術であるかを以下のように説明する。「コハ何ニモアレ、物ヲ論ラヒナムト、思フトキ、マツ理リノ至レルヤ、ハタ至ラサルヤヲ、試ムル爲ニ、トアル題ヲ設ケテ、其理リニ、合^{カフ}ヘルヤ否ヤヲ、探ラム為ノ」(392頁)術である、と。さらに近頃「^{ハミルトン}合美拉頓氏」により「思慮ノ法ノ學」と定義されたけれど基本的には変わりはなく、「此頃ノ碩儒、カノシストム・オフ・ロジックテフ、名立タル^{フミ}書ノ、著者ナル、約翰 士低亞多 彌爾氏ニ至リテ、大イニ其面目ヲ、新タニセリ」(393頁)と西なりの見解を示して、「旧キ致知學」は「唯論ヒノ理リヲ、試ムルマテノ術」にすぎず、「言ハハ黄金^{ヨシアシ}ノ良否ヲ見ルニ、カノ試金石^{ツケイン}ヲ、用フルカ如シ」としてその積極的意義を認めず、ミルの新しい致知学こそ「新タニ、アル理リヲ、發明スルコトニ」(同上)役に立つのだと指摘する。

しかし先に記したように、この指摘とは裏腹に「今、此書ハ、旧キ致知学ノ、合率ノ諸法ノミヲ挙ケ」るのでは、何かチグハグな感が否めないし、当時の読者には多に不満が残ったであろうと推測される。

「文學関渉」と題される第二章は、致知学と「言語文辞ノ学」(=文学)の緊密な関係が、「考ヘト、言トハ、イト親シキ族ラ」(393頁)であるとの認識から考察される。致知学は本来文章科を構成する語科(Grammar)文科(rhetoric)と並び、そしてその「奥」(=要)でもある論科として出発した。と言うのは、文字(=文)によって考えも表現されるのであって(=「ナヘテノ考ヘヲ、総フ」る)、「総ル文字テフハ、即チ考ヘヲ写セル、唱フヘク、記ルスヘキ言」(394頁)であるからである。従ってこのような理由から、致知学のない所でも、「ナベテ、論ヒニ涉レル語ハ、此則^{コトバ}ヲ知ラス知ラスモ、^{オキテ}目ラニ、踏ミツル」(394頁)のである。だからこそ、親しい関係にある「言語文辞ノ学」と致知学のけじめをわきまえ、その境

界をはっきりさせる必要がある。

以上が「文学関渉」の要旨であるが、ここには、西なりの「考へ」「言」「文字」の三者の関係についての、恐らくそれ以前の日本人には把握されていなかったであろう考えがはっきりと打ち出されているとも言えよう。

第三章は非常に短い章(この書の中でも最も短い)で「學術分岐」と題されているが、致知学が大きく二つの分野から成っているという指摘を行う。これは古くからある分け方で、一つは「専ラ観察上ニ涉リ、心カノ運用ヲ宗トシ論ヒ、直チニ哲学ノ一部タル者」としての「單純致知」[pure logic](=純粹論理学)であり、他の一つは「右ノ運用ヲ、事ニ引キ充テ、論ラフ者」(39頁)としての「施用致知」[applied logic](=応用論理学)である。しかし二つに分けて扱えられていたにも拘わらず、共に「術」として継承されてきた(その根拠は筆者が注(16)で記したように、論理学=ことばの技術観にある)が最近吼多爽^{フクトレイ}氏が、致知学は学と術を兼ねていると指摘し、さらに、前者は「専ラ学ノ等輩ニ齡ヒ」とする学として、後者は「専ラ術ノカタニ就」く、と区別したが、この区別はなるほどもっともなことであると、その考えを西は受け入れている。

両者いずれも「演題」(=三段論法)を適用して事柄の当否を判定するものではないが、と断って、ここから西の形而上なるものへの傾向がよくうかがえる考えが述べられる。

「此学ヒニ依テ、形而上ニ涉ル理リヲ、断ハルニ、自ラニ、カヲ得ルハ、其功ホシ、誠ニ鮮シトセス、故ニ、術ト云フヨリモ、学トイフニ、重ク涉リタレドモ、……」(395頁)

西はあくまでも論理学が、断るまでもないが、古い論理学である形式論理学が、形而上に関わる分野ではその威力をよく発揮するのだと考えており、その故に術というよりは学であるとの認識が示されている。しかし、また、「……アラユル事ノ理リヲ、考ヘ定ムルモノ」でもあるので、「術タ

ルヲ免レ難シ」なのだとも言って、結局、致知学は「学ト術トニ、涉リタル」という特徴をもつのだというフートレイの主張を確認している。⁽¹⁶⁾

第四章は「原由学域」と題されていて、論理学という学の対象分野が特定されている。

第二章で西により受け入れられた、合美拉頓^{ハミルトン}による「思慮之法ノ学」としての致知学の考えから、致知学と性理の学との親近性に触れることになる。それは、致知学が、「心ニテ、トアル物ヲ考へ、物ヲ弁マへ、又物ヲ定メテ、然ナリト知ル」(396頁)という「三ツノ運ヒ」に関わる学だからである。しかし、性理学に較べれば、その分野は狭い。というのは、情、意は致知学の分野から外れるからである。即ち、「致知学ハ、専ラ智ノ性ニ本ツキテ、情ト意トヲ、域ヒノ外ニ置キタリ」(同上)。

さらにこの「智ノ性」からも「致知学ノ疆ヒヨリ外レタル者」(同上)があって、それは何かというと、「直覚、又無媒諦」(397頁)と名付けられるものである。例えば、春の草を見て「緑ナリト知り」、秋の楓を見て「紅キナリト知り」という類の。⁽¹⁷⁾

このようにし致知学においては、情、意、直覚(=無媒諦)がその範囲から取り除かれ、残された分野は、知のなかの「無媒諦ト、正ニ表裏^{ウラハラ}トナリタル、有媒諦」ということになる。

続く第五章においては、観念(又は概念)の形成についても記述される。表題は「念区概括」である。「念」(=観念、概念)は「直覚ノ積リテ、念トナル」(397頁)のであるが、つまり、「初テ犬ヲ見テ、其犬タルヲ知ル」(398頁)は直覚であるが、ここから出発して、さまざまな犬を見るという経験の積み重なりを通して、犬について心中に形成されたもの、それが「念」である。そしてこの「念」が形成されると、すべての犬について、犬と見ることが可能になり、その可能とする能力が「概括力」(=一般化、

普遍化の力)と呼ばれ、これが「知り」の始まりとなる。

「念」には、量(=「度量観」)の側面と、質(=「形質観」)の二側面があって、それぞれの側面に即して「概念(= notion)」「想念(= idea)」と対応して呼ばれ、「念」の言語表現である名が「通フ名」(=普通名詞)と「専ラニスル名」(=固有名詞)に分たれる由縁となる。(398頁)

そしてこの「想念」の一種に「想像力」があるが、それはややもすると「妄想」に陥り易いからとの注意が付されるが、この「想像力」については何ら説明はなされない。何の根拠も示していないが、想像力は「性理学ニテ、イト重キ司サヲ勤メ、爰ニテモ、ナヘテ形而上ノ事ノ論ラヒニハ」(398～399頁)助けとなること特に多い、と述べて、ここでも西の、致知学を性理学上との関連で捉えていく傾向がよくうかがえる、と言えよう。

4

「命名定義」と題された第六章から、古い致知学の本体にいよいよ踏み入ることになる。

第六章から第二巻の冒頭第_三章命題諸式までが、普通形式論理学の三大部門の一つとされる名辞・命題論であり、第_十章対偶互証から第_二章模範諸種までがもう一つの部門演繹推理である。残る一章第_五章婦納開端は残りの部門である蓄然的推理への導入部である。

「名(前)」は「念(=觀念)」が作られることにより形成されるが、それは念が「言^{コトバ}」(=言語表現)に、つまり、声に出されたり、言語記号に記されることにより、可能になる。「名ハ、マツ念アリテ、後ニ生ル>者ナル」(399頁)であるが、人の世が開けてからは、名を先に知って物(=物の念)が後になることが多い。それを先天 a priori と後天 a posteriori ということばで述べている。そして前章で述べられたように、この名に「通ヘル名」と「専ラニスル名」があると指摘するが、これは、「語^{コトバ}ノ学ヒ」

に譲るとして、これ以上、言及されない。⁽¹⁸⁾このようにして、前章での記述を受け継いで次のように整理する。

「書セル言ハ、唱ヘタル言ニ本ツキ、唱ヘタル言ハ、直覚ヨリ得タル念ニ、本ツキ、念ハ物ヲ知ルヨリ出ツ」(399頁)

つまり、物→念→唱ヘタル言→書セル言(=「記セル記号」という四つの媒介を経るのである、と。そして遠望鏡^{トホメカネ}の例を使って、その眼鏡の玉がよく真を写さない(「微力=隠レタル理リヲ、能ク見分ケ、知り分」(400頁)けない)と、形の真を失うように、理りの真を顕わすことができなくなってしまうので、「定義ノ術」が大事になる、と言う。「違イノ出来易キハ、……物ノ物タル所ヲ、念ニ包ミ得サルト、又逆サマニ、言ノ意^{クル}ヲ、念ニ酌ミ取り得サル」(400頁)場合、つまり「物ト念」「念ト言」との間に、真を失う危険性がある、と指摘する。そして真を捉え損っていると気づいたら、あくまで物を真として、これに照らし合わせて、念を訂正すべきである、とは、西の実証主義的態度がよく表れている指摘であると言ってよいであろう。命名定義はつねに出発点である物に即すべきことを最優先にするべきだというのである。

ここで先の「通ヘル名」と「専ラニスル名」の区別に加えて、具象名詞と抽象名詞(ということばは使っていないが)の区別を導入する。定義にあたってつねに物に即すべきとは言っても、それは「正^{ナリ}シキ形ノアル物[concrete]」には可能だが、「正^{ナリ}シキ形ナクシテ、其性質ノミヲ、指シタル想像上ノ物[abstract]」(同上)にはそうはいかない。特にこちらは「違ヒノ、イトモ多キモノ」であり、それは検証すべき対応するものがないのである。ではどうしたらよいのか。これには「佗^{テタテ}シ術ナシ」とお手上げかという、西は次のように解決方法を提示する。「唯今ト昔シノ、正シキ文、ハタ勝レタル著述家ノ、論^{モノ}セル者ナトヲ、考ヘ合セテ、言ノ意^{モノ}ト、

己ノカ念トヲ、正スヘキナリ」(同上)と。ここには、かつて西が朱子学にあきたらず思っていて、偶然手にして学んだ徂徠学の影響が強くていえると言えよう。特に「正シキ文」つまり古典に帰って、物に格くという(この場合「正シク形ノアル物」といわれる物とは異なるとはいへ)ことから出発するという、先の指摘と同じ姿勢をとっているのは注目すべきことである。西の最大の関心事である形而上のことが、一半がこのことと大きく関わっているが、他方西はそれで満足するのではもち論ない。この書とほぼ同時に書かれた『生性發蘊』に見られるように、もう一方に於いては、「生理ノ実験ニ據テ、性理ノ蘊奥ヲ発スル」(67頁)という考えへの指向を強くもっているのである。

この章ではさりげなく、それと明示していないが、論理学と形而上学の関係における、論理学の重要さ、困難さを明確に自覚していると言ってよいだろう。

第七章鉤念引考において、名辞から命題への移行が論じられる。媒介された念もそれが「単ヘナル念」つまり犬を犬と題したものは、「唯直覚ノ、念トナリタルヲ、言ニ題シタルマテナリ」(401頁)であって、致知学の用に供すべきは、「春ノ草ハ、緑ナル者ナリ」の類の「有媒諦」であるのだが、これは「無媒諦ニ嫌ヒアリテ、且イト知り易キ理リナレハ、何程ノ価値モアラス」(同上)とする。しかし「何程ノ価値モ」なくとも、これはこれでよいのである。退ける理由は何もなからう。西はしかし、「必ス上ナル言ハ、イト知レ難キ理リアルヲ、下ノ言ニテ、説キ明シタル」(同上)類のものであるべきだという。つまり、主語と述語の間に直感的に了解しうるような類のものは価値がなく、難解な主語を述語が説き明かすような類のものである必要がある、と言うのである。

西の挙げている一つの例を見てみよう。「郷愿ハ徳ノ賊ナリ」においては、郷愿は世にも誉れあり、郷党にても皆彼を信じているが、その行い

に有徳であることを疑わせる点があるから、「徳ノ賊」と断じられる。郷愿の郷愿たるはすべての人に知られており、有徳の人の妨げとなる者を徳の賊というのも誰にも知られているが、このように、「上ノ念ト、下ノ念ト、相待チテ、其間タニ、知ル所アルヲ、有媒諦 [mediate cognition or inference] (同上) と呼ばれる。

この「知ル」は、両方の念が結合されて、「唯郷愿ヲ、徳ノ賊ナリト、知ルコトニテ、……知りテ念ヲ作ルニハアラス、作りタル念ヲ合セテ、上ノ念ト、下ノ念ト、相係ハル理リヲ、知ルコト」(同上) である。つまり、主語、述語はそれぞれ既知の念であるが、それを結合することによって、それまで未知であった新しい知が明らかにされるというのである。「此二ツ者ノ、相係ハル理リヲ、知ルニテ、郷愿ト、徳ノ賊トノ、媒チニ因テ、知りタル理ナリ」と記される。

このような「知り」を「有媒諦」(=媒介された真理) と呼び、「其考へ」を「弁証ノ考へ [discursive thought] (403 頁) (=媒介されて真理に到達する考え) と呼ぶが、これは致知学の要諦である。

本章の題である鉤念引考とは、このように「一ツノ念 (=主語) ヨリ、一ツノ念 (=述語) ヲ鉤引シ、一ツノ念ヲ一ツノ念ニ、套挿スルノ運用 (主語を述語によって媒介し、主語と述語の一体化した知を創り出すこと) ヲ、考ヘト云ヒ、」(同上) ということの意味している。

さらに論じられることなく、「考へ [thought]」、「弁 [judgement]、が同格に置かれ、性理学では、「意思 [will]、思慮 [thought]」、「思量 [consideration]」、「思惟 [contemplation]」、「計較力 [comparison]」とそれが呼ばれる、と西苦心の訳語が列挙されるが、省略が過ぎるのではないだろうか。そしてこれらは皆「念ヨリ決ニ致ル」中間的運用であると指摘される。そして、「念」「考へ」「決」三つが致知学の三大運用となす、と記されているが、これは現代の適用語に置き換えれば、名辞、命題、推理と考えて間違いなからう。

5

第八章は立極命題と題して、極を立てて命題をなす意と思われるが、いよいよ名辞論から命題論に移行する。冒頭いきなり proposition を、現在も通用している「命題」と訳して、「命題ノ法ハ」と始まり、命題の形式「イハロナリ」(403頁)を提示する。「命題」と訳したのは、「イハロナリ」ト、命スルニテ、上ミニ、物ノ名一ツ、下_モ二物ノ名一ツナリ」(同上、下線筆者)と述べているところに由来するのだろう。そして、この名はこの学びでは、「名」とか「言」といはず、原語の term の本来の意味と、本来の命題の形の「イハ ナリ ロ」と両極にあることから、「極」と謂ふ、と断る。

そして、この極は、「言ハ二種^{クサクサ}々ノ別チアレト、爰(=致知学)ニテハ、引キ^{クル}概メ」てそう言う、そして「唯一ツニ纏メタル、念ノ標」(同上)であると言われる。それは、「犬」とのみ言うのも、「白犬」と「形質言」(=形容詞)をつけていうのも、「吾家ノ犬」と「指示言」(=指示形容詞)をつけていうのも、みな「一ツノ念ノ標」と見なすということであり、更に「佗シ書キ廻シ」もそうだというとき、この念は当然「～であること」のようなものも考えられているのであろうか。

われわれが現在主語、述語と呼んでいるのを、主位、属位と呼び、それぞれ「題ノ重ナル念」、「主位ニ属セル念」と説明され、「ナリ」は「定言」(=繫辞、連辞)と呼ばれる(404頁)。そして「ナリ」、「ニアラザルナリ」をそれぞれ、これまた現在われわれが使用するように「肯定」「否定」という訳語を用いている。⁽¹⁹⁾

ここでは普通の翻訳であつたら何ら西も問題にしないであろう事柄に、学問的厳密さを求めて、つまり日本語と英語の相違の一つである、「イハロナリ」の「ハ」について触れている。「ハ文字ハ佗シ国ノ言」にはない、いわゆる「テニヲハ」はない。これは「区別ノ助辞」で、「佗シ国」にお

いては、「正例（＝正書法）ニテハ、……適ハシ用フヘキニアラス」（同上）と指摘している。

主属彙類と題された第九章は、主語と述語の関係及び分類という事柄について述べる。

主語と述語との関係は「形質観」に基づけば、「鉤引ノ運用 [reduction]」⁽²⁰⁾ という「法」（405頁）に従う。この場合主語は「正^リシキ形アル物ノ名」でなければならない。「月」と言えば、「圓カ」「明カ」「清シ」などの「形質」が含まれていると考えられる。前者は「名サシ挙ケテ極トスル物」で「実体」と呼ばれ、後者は「実体ニ附キタリト考フル物」で「属性」と呼ばれる。このことから、主語（＝「実体」）から述語（＝「属性」）が「鉤引」されて、「月ハ清キ者ナリ」という命題を作ることができ、この「法」を「鉤引ノ運用」と呼ぶのである。

他方、「度量観」に基づく場合、「套挿 [induction] ノ運用」に従う。そしてこの運用はさらに「彙類ノ法」（＝分類法）（同上）を前提にしている。この法には二種の運用法があつて、「分解法」（＝分析）と「總合法」（＝総合）である。この二種の法の運用は、何も致知学に限定されることなく、すべての学問にも、日々の生活においても、大事なことで、この運用の仕方次第で人の能力の差が出て来る、と致知学以外の効用が指摘されている。（406頁）例を挙げて、「分解法ハ、細ヤカナルヲ、尚細ヤカニシ、総合法ハ、大イナルニ、尚大イナルヲ加工」るのだと述べられ、総合法は「歴上ル」のであり、分解法は「歴下ル」方法と次いで述べられ、天地の間のすべての人の心の考えに入るものはすべて、この境界を逃れることはできない、というとき、この発言によって、西は哲学の領域での発言をしている、と言ってよいだろう。

そしてその分類における、「上行」（＝上位（概念））、「下行」（＝下位（概念））、「同行」（＝同位（概念））と呼ばれる位があつて（同上）、「上行」は。

「類」、「下行」は「種」と古くから言われていると注している。

なおここで、致知学と直接関わるのではないが、例を挙げた説明のなかに「機性体」「無機性体」ということばが出ていることを付しておく。

6

第十章は「歴上套挿」と題して、前章で指摘された「彙類ノ法」における「歴上」「歴下」の観点から、「套挿ノ運用」について論じる。歴下りすることによって、「実体ノ念、愈々増シ、属性ノ念、愈々減リテ定リ」、歴上りすることによって、「実体ノ念、愈々減リテ定リ、属性ノ念、愈々増シテ広クナル」と適切に指摘した上で、このような考え方から、「套挿ノ法」が論じられる。「主位ノ言(=主語)ハ、種名ニテ、下行(=下位概念)ナルベク、属位ノ言(=述語)ハ、類名ニテ、上行(=上位概念)ナルヘシ」(408頁)だから、「牛ハ獸ナリ」「獸ハ動物ナリ」とは言えるが、「獸ハ牛ナリ」「動物ハ獸ナリ」とは言えない。それは後者の場合、種概念である述語に類概念である主語を套挿することになるからである。

さらに、「同行(=同位概念)ニテハ、少シモ、属位ニ取ルヘキ理リナシ」(同上)と指摘し、不可の例として「魚ハ鳥ナリ」「梅ハ桜ナリ」が挙げられる。

ここでまた、西がなぜ『致知啓蒙』を著したかの理由を、そして致知学への西の思い入れが、チラッと顔を覗かせる。曰く、以上のような彙類の運用は「此學ヒノ^{モチマエ}本分ナル法ニテ、弁証ノ考ヘニ、用フル所多キソカシ」。(同上)

ここで、前章からの整理を行う。

「主位(=主語)ヨリ、属性ヲ鉤引シテ属位(=述語)」とするのを、「鉤引ノ運用」とか「演繹 [deduction] ノ法」と言い、「下行ノ主位(=下位概念である主語)ヲ、上行ノ属位(=上位概念である述語)ニ套挿シテ、

属位 (=述語)」とするのを、「套挿ノ運用」とか「帰納 [induction] ノ法」と言う、と。(同上)

先に挙げた「牛ハ獸ナリ」の例で考えると、「演繹ノ法」では、「牛ノ中ヨリ、脚、四ツアリ、……道理ヲ知ル性ハナシ」等の属性は、「……能、馬ニ似タレハ、馬ト同シク、馬ノ性ヲ、備ヘタリ」と考へ、「帰納ノ法」では、「牛ハ上ニ云ヘル性ヲ備へ、馬、羊、狼、犬ナトニ、似タレト、燕メ、雀ナトニモ、鯉、鯽ナトニモ、似ス、サレハ、其総称ハ、獸ニテ、獸ノ一ツトシ、其類ヒニ、入レ挟ミテ」、どちらの場合も、「牛ハ獸ナリ」と「題ニ命」じられる(同上)。

ここでまた西の見解として次のように記される。「アルハ、之 (=「套挿ノ運用」ハ彼 (=「鉤引ノ運用」) ニ、勝レリト、謂フ説アレト、彼ハ、主位 (=主語) ノ属質ヲ、属位 (=述語) ニ引キ下シ、此ハ、其属質ノ相似タルニ因リテ、下行 (=下位概念) ヨリ、上行 (=上位概念) ヘ引キ挙ル者ニテ、……、二ツノ運ヒ、相待ツナリ」(同上) と。しかし、当時においても、この引用の冒頭で西が述べているように、また現在においても「文(此)」の見地から命題を捉えていく方が、次の章のこぼを使えば「外延」の見地から命題を捉えていく方が、有効であると認められていることは、次章および「演題 (=三段論法)」を論じる段において明らかであることを指摘しておこう。

第十一章は、現在でも使用されている「外延内包」という語の章題をもつ。

前章において指摘されたように、「獸ハ牛ナリ」とは言えないが、「或ル獸ハ牛ナリ」のように、度量観において「其標シヲ加へ」(409頁)る (=限量する) と、命題として妥当するものになり、「徳ハ仁ナリ」とは言えないが、「徳ノ大イナル者ハ、仁ナリ」のように、形質観において、「其標シヲ加へ」る (=形質を加える、つまり限量する) と、同様妥当するものになるが、後者の場合、「形質ノ標シモ、度量観ト変リテ、其全サヨリ、

減リタル」と認められるように、西が前章末尾で、「ニツ相待ツ」と言ったにも拘らず、筆者の指摘したように、度量観からの立場から、論理学が論じられているのを西も認めざるを得なくなっている。⁽²¹⁾ 形質も量りの標となるのである。

ところで、「言ハ」には、「外延」と「内包」の二側面がある。「言ハヲ、実体ノ名トシテ、見レハ、度量観ニ移リテ、之ヲ、言ハノ外延 [extension] ト名ケ、又属性ニ就テ、見レハ、形質観ニ移リテ、之ヲ言ハノ内包 [comprehension] ト名ク」。(410 頁) 現代風に言い変えれば、名辞の適用される対象の集合を、その名辞の外延と言い、名辞の集合全体に共通な性質を、その名辞の内包 (=意味) と言う、ということか。そしてここでも又、「此ニツノ考ヘノ中ニテ、外延ノ考ヘハ、即チ度量観ニテ、重ク命題ノ上ヘニ、係ハルコトナリ」(同上) と認めている。

そしてこの外延の考え方が三つに分けられるとして、単称、複称、全称としている。ここでも、日本語の問題を取り上げて、日本語には「一ツ言ハヲ変ヘテ、単称ト、複称トヲ、分ツ例シナケレハ」と指摘して、必ず「下モニツツテフ言」「上ミニ指斥言ノ、此テフ言ハ」(同上) を加えて、全称と紛れないようにすべきだと言う。特称には「或ル」、全称には「凡テノ」(411 頁) ということばを付す、というのは現在と同じ考え方である。(否定の全称には、「下モニ何レモ」を付す)。全称には「泛指 [indefinitive]」と「分称 [distributive]」の二種があるが、前者は「ものをくるめたるころ」を、後者は「ものをひとつづつ、のこらずあくころ」(377 頁) を示すが⁽²²⁾、結局同じことであるから。あまりこだわらずによい、とされる。⁽²³⁾

ここで突然「又度量ノ称ナクトモ、演題ニテハ、断言少極ハ、常ニ此テフ意ニテ、老約ハ、ナヘテテフ意ナルヘシ」(411 頁) と言われて、読者はとまどったのではないだろうか。「演題 (=三段論法)」、「断言 (=結論)」、「少極 (=小名辞)」、「老約 (=小前提)」ということばが何の説明

もなく使われているのには。しかもその語が理解し得ても、なぜそうなのかが全く理解できなかったであろう。これらのことが理解できるためには、第九章まで読み進む必要があるのだから。拙論も、そこで触れることにする。

この章の最後の文に移ろう。「ナヘテ、外延ノ考ヘハ、全称ニ渉ルコト多ク、又内包ノ考ヘハ、特称ヲ用フルコト、常ナリ」(同上)と記されるとき、その意味はどうなのか。全称は「ナヘテヲ^{コト}挙ル称」だから、外延の見地から捉えられているのに対して、前に見たように特称は「主位」に「形質ノ標」を加えて「主位モ、属位モ、正^{シク}シク、同シ量リ」とすることにより成り立つとの考えから、内包の見地から捉えられる、ということなのであろう。

7

第一巻の最終章である第十三章は「同異表決」との章題をもつ。先に触れた致知学の三大運用(「念」「考」「決」)のうちの「決 [conclusion]」の形体を表わす「定言 [copula]」についての議論が主題である。「一体」(= 個体)を見て、「此犬ハ此犬」「此犬ハ能^ク吠ユル者ナリ」と言うとき、それは他の犬には妥当せず、この犬だけに妥当することで、これを「眞一 [truism]」又は「自己明証 [self-evidence]」(412 頁)といい、これは致知学上の問題ではない。しかし、「眞一」において「此イハイナリ」「此イハ彼イニ非ルナリ」は、致知学において「イハロナリ」「イハハニ非ルナリ」と言うのと同じで、「其同異ヲ求ムル」のであり、「イハロト同一ナル者ニテアリ」「イハハと不同一ノ者ニテアリ」と定めることである。これを「同一 [identity]、不同一 [non-identity] ノ弁」と言い、「可考不可考 [consistence and non-consistence] ノ決」(413 頁)とも言う。これが章題の意味であろう。

今まで述べてきた種々の法に従って「己ノ心ヲ以テ、己ノ心ヲ運」ん

で、「同一ナリ」「不同一ナリ」と考えるのを「決」と言い、「言ニ顯ハシテ、肯定ニテナリ、否定ニテニ非ルナリ」と表現することを「定説 [assertion]」と言い、その表現されたものを「定言」と言うが、実はこの「決」を行うのは「心」ではなく「理性 [reason]」なのであり、天の人に与えた「靈智 [intetellect] (同上) なのである。⁽²⁴⁾

そして理性の「シカニテアリ」とか「シカニテ非ス」と決めることを、「莫逆嘉納 [non-contradiction]」(=無矛盾)の法と呼んでいる。これは現在「思考の原理」とか「論理学の原理」と呼ばれているものであり、それは三つの「單元 [axiom]」から成っていると指摘する。第一は「肯定ノ定説」(=同一律)と呼ばれる。これは「同一ナリ」と定められ、「属位、主位ト、同一ナリト定メサレハ、肯定ノ題ハ、考フヘカラサルコト、譬ヘハ、「イハロナリ」(=「AはAである」)テフカ如シ」と説明される。以下の二つについてもそうであるが、この様な説明からすると、どうも西は、これら三つの單元から成る「莫逆嘉納ノ法」を実在するものについての基本法則のように捉えていた節がうかがえるが、そうだとすると誤解であろう。これらの單元は、推理においてイはロとしたら、結論に達するまで、途中でそれを変えないということであって、推理の一貫性を守るための基本法則なのである。

第二は「否定ノ定説」(=矛盾律)と呼ばれ、「不同一ナリ」と定められ、「属位、主位ト、不同一ナリト、定メサレハ、否定ノ題ハ、考フヘカラサルコト、譬ヘハ、「イハロニ非ルナリ」(=「Aは非Aではない」)ノ如シ」と説明される。第三は、名称はつけられていないが(もっとも第三卷第十三章、つまり次の章で「配偶無二ノ法」と呼ばれているのが、それである。)、
「一ツノ念ヲ、主位トナシ、佗シ念ヲ、属位トナシテ、二ツノ者ノ、相係ハル考ヘハ、必ス肯定ト、否定トノ中、其一ツニヲチテ、肯定ト、否定トノ、中間ニ、在ルコトナシ、譬ヘハ、「イハロナリ、然ラサレハ、必スロ

ニ非ルナリ (=「AはBか、または非Bである」) テフカ如シ」(同上)と説明される。これは「排中律」と呼ばれるものである。

そして、これら三つの単元は、以前は分けて考えられなかったが、近頃の大家は分けて考えていると指摘しているが、このことは現在においても妥当する、と言えよう。ただし、「内ニテモ^{イデハテ}最後ノ單元ハ、其カイト強く、其用ヒ極メテ大イナリ」との記述が、いかなる根拠に基くのかは、説明抜きでなされていて、その真意は不明である。

以上見てきたところで、第一巻は終わる。第一巻は、西のことばを使うと、「學ニ附キタル所」で、以下「術ニ渉ル所」である第二巻が続く。⁽²⁵⁾

注

以下『致知啓蒙』及び、それに関連して触れる『学原稿本』『五原新範』からの引用については、『西周全集第一巻』(宗高書房刊、大久保利謙編、昭和56年10月、再版)の頁をカッコ内アラビア数字で示し、その他は、その都度記する。なお本文中(=…)は現在一般に使用されている用語に、筆者がおき替えたものである。引用に際して、旧漢字は現行の新漢字に改めた。

なお、冒頭に漢文「致知啓蒙自序」があるが、拙論では最後に触れることにする。

- (1) 上記全集解説(大久保利謙)(638頁)
- (2) 上記全集(289頁)
- (3) 書誌的なことに関しては、上記全集解説(638頁～662頁)参照。
- (4) 『郵便報知新聞』明治7年12月23日、542号。上記全集第三巻解説(59頁)
- (5) カントの『啓蒙とは何か』にはこう書かれている。「啓蒙とは、人間が自分の未成年状態から抜け得ることである。ところでこの状態は、人間がみずから招いたものであるから、彼自身にその責めがある。未成年とは、他人の指導がなければ、自分自身の悟性を使用し得ない状態である。……それだから、「敢えて賢こかれ!」、「自分自身の悟性を使用する勇氣をもて!」——これがすなわち啓蒙の標語である。」(篠田英雄訳『啓蒙とは何か』岩波文庫、7頁)
- (6) 西周全集第一巻』には、刊本の『致知啓蒙』の他に、『学原稿本』と『五原新範』

の二つが、刊本以前の稿本として収録されているが、前者が明治二年八月の起稿、後者は編者の推定で明治三年から六年一月以前とされている。その前者の冒頭でロジックが「学原」と対応させられているが、後者では、時期は明らかではないが、『五原新範』の「五原新」の部分が朱線で抹消され、「致知」と横に書き直されている。(343頁)

それ以前の例としては、例えば、イエズス会士アレーニの『職方外紀』(天啓三年、1623年)巻二において「落日加」と音訳されているのが見られる。(斉藤毅『明治のことば』講談社、昭和52年11月、319頁)

また、刊本『百一新論』において「致知学」(264頁)ということばが使用されている。刊本と稿本の内容異同についてはすぐ後に触れる。

- (7) 福鎌達夫『明治初期百科全書の研究』(風間書房、昭和43年5月)19～25頁、及び菅谷廣美『「修辞及華文」の研究』(教育出版センター、昭和53年8月)24～63頁を参照。
- (8) 『共存雑誌』(『明治仏教思想資料集成』別巻、同朋舎、1986年2月)236頁以下。
- (9) 『哲学字彙』(名著普及会、昭和55年8月覆刻版)51頁。『増補改定哲学字彙』71頁。『英佛獨和哲学字彙』87頁。(いずれも同上復刻版)

ただし、問題として残るが、明治10年に東京大学文学部が開設されたとき、外山正一が論理学を担当し、次いでフェノロサが14年から論理学を担当しているが(山口静一『フェノロサ』上、三省堂、1982年4月、34～50頁。)、実際に「論理学」ということばが使用されたかどうかは、筆者は確認していない。井上の『哲学字彙』との齟齬が残る。

- (10) 筆者が参照し得たのは、A SYSTEM OF LOGIC, ratiocinative and inductive, NEW YORK, HARPER & BROTHERS, PUBLISHERS の1882年刊の第8版であり、当然、西はそれ以前の、即ち、『学原稿本』の起稿された1869年以前の版を使用しているはずだが、そして、ミルは改版のたびにかなり大巾な改訂(主に批判に応えるために)を行っているが、巻構成に関しては問題ない。ちなみに巻構成は次のようになっている。

BOOK I	OF NAMES AND PROPOSITIONS	P.26 ~ 120
BOOK II	OF REASONING	P.121 ~ 206
BOOK III	OF INDUCTION	P.207 ~ 448

BOOK IV	OF OPERATIONS SUBSIDIARY TO INDUCTION	P.449 ~ 511
BOOK V	OF FALLACIES	P.512 ~ 578
BOOK VI	ON THE LOGIC OF THE MORAL SCIENCES	P.579 ~ 659.

なお、西はこの書を訳して「致知軌範」(448頁)としていることを付記しておく。(ただし、systemを「模範」とも訳している。445頁)

(11) ミル前掲書 P.21.

(12) 309頁

(13) これと同様の記述が他にもあり、参考のため以下列挙する。

「今、此書ハ、旧キ致知学ノ、合率ノ諸法ノミヲ挙ケ、聊カ初ヒ学ヒノ楷梯トナシ、其詳カナルコトハ、悉ク本ツ文ニ、譲リヌヘシ」第一章、393頁)

「……今は唯其梗概^{アラマシ}ヲノミ挙テ、委シキコトハ、原^{モト}ツ文ニナム、譲リツル」(第^六章、424頁)

「……致知学の本書ニ考フヘシ」(第^一章、442頁)

「……コハ皆其原^ヲツ書ニ、譲リテ、爰ニハ漏シツ」(第^四章、445頁)

「……新シキ致知学ノ、帰納ノ法ハ、固ヨリ約翰・士低亞多・彌氏ノ致知軌範ニ、譲ラムト思ヒヌルニ……」(第^五章、448頁)

「……学者ソレ之ヲ本^ヲ書ニ講究セヨ」(第^五章、450頁)

(14) この書は、ミルの上掲書に依拠しつつも(どうも漠然とだが、必らずしもそうでない節もうかがえる。と言うのは、ミルの前掲書は『致知啓蒙』ほどに、特に三段論法に関して、記されていない部分があり、また必要最小限以下において該当部分の検討をするが、引用が原書と異なる部分があるからである。)。あくまでも西の著書であり、翻訳書ではないから、原則として、ミルの原書との比較校合は行わない。又、それは拙論の意図ではなく、西によって、論理学がどう理解され、その理解がどう記述されているかを見ていこうとするものである。

(15) この簡略な論理学史、又、次に触れる「ロジカ」「デアレクチック」の語源についての記述は何に依拠しているのだろうか。少なくともミルは『論理学体系』において論理学史は記していない。後述するように(本論(下))、ハミルトンの書に依拠しているのではないだろうか。なお「ロジカ」の語源は、「デアレクチック」と同様、「ロゴス」と「テクネー」の合成語として成立した「ロギケー」(=ことばの技術)に由来するのだが、西の参照した書には「ロゴス」に由来するとしか記されていないかつ

たのかもしれない。

- (16) 第三章での、致知学を「単純致知」と「施用致知」に分つ発想から着想を得たとは言いがたいが、そして、必ずしもそれに対応するわけではないが、後年西は『東京学士会院雑誌』(第六編文四、明治十五年五月)に「論理新説」を発表している。そこでは論理学が「観門ニ属スル論理学」と「行門ニ属スル論理学」に分けられている。
- (17) 当時は、直覚=無媒諦と一般に考えられていて、それに従う西の見解は時代的制約を受けているのはやむを得ないが、現在においては、直覚といえども、西のことばを使えば、有媒諦(397頁)であると見なされる。例えば、フッサールによる「感性的直観と範疇的直観」についての考察(立松弘孝訳『論理学研究4』152頁以下。みすず書房、1976年12月)参照。
- (18) この「通ヘル名」と「専ラニスル名」、つまり普通名と固有名の相違を、その源が、前章で述べられた、そして前章でもそのように述べられていたが、概念と想念に由来する、とされていて、概念→「通ヘル名」、「想念」→「専ラニスル名」のように述べているが、そうではあるまい。概念は「度量観」(=量)の側面に、想念は「形質観」(=質)の側面に係わるのであり、その量の違い、形質内容の違いに、両名の区別は由来するというべきである。名は、「度量観」と「形質観」、後に出てくることばを使えば、「外延」と「内包」の両側面をもつのであるから。
- (19) ここの條りで、「時モ第二ノ現在ニテ、物ノ続キタルヲ示シ、……」の意味が筆者にはよく解らないが、「イハロナリキ」のような過去、あるいは未来を表わすような命題を念頭において、これを「イハロデアッタモノナリ」のように捉え直すことを含意しているのだろうか。
- (20) ここで全集の編者は、刊本で「鉤引 [deduction]」とあったのを、「刊行用の版下に近い楷書で書かれた」前掲のものとは別の稿本『致知啓蒙』により [reduction] と訂正しているが、本文で「其中(=実体)ヨリ、一種ノ属性ヲ鉤引シテ」とある以上、元の [deduction] のままでよい、と思われる。編者は恐らく、その前の「実体ヲ一ツ挙テ、是ニ附キタル形状、性質、功用ナト、ナヘテ、何ニマレ、ソレニ附キタル者ハ、悉ク其中ニ含ミタルト孝フヘキ言ニテ、」「月トイハ、圓カナリテフモ、……其中ニ籠レリト、考フルガ如シ」(下線筆者、405頁)にひきづられてそうしたのであろうが、「鉤引」とは拙論のこれに続く事柄を言うのである。さらに408

頁には、「鉤引ノ運用、又演繹 [deduction]……、套挿ノ運用、又歸納 [induction]……」とあることから明らかであろう。

- (21) ここで挙げられているもう一つの例「仁ヲスルノ本ハ、孝弟ナリ」は、例として不適切であろう。「仁ハ孝弟ナリ」が先に考えられているのでであろうが、「仁ヲスルノ本」と「仁」に形質を加えていうときには、それは「仁」の限量化ではなく「仁」と別物になってしまっているので、主語が変わって、別の命題になってしまっている。
- (22) この箇所は稿本『五原新範』よりの引用である。
- (23) ここで「唯命題ニテハ、明ラカニ、全称ト特称トヲ示ス……」と述べて、単称については触れていないが、単称は全称扱いにするとということ、西は認めているのだろうか。
- (24) 理性云々については『生性発蘊』で論じているので、ここでは触れない、と断っている、それ以上拙論でも言及しないが、そこでは例えば、理性を「道理ヲ知ルノ性」(35頁)とか、「靈智ト訳スルハ理性ト同シ、唯独語少シク差異アルヲ覺フ 故ニ靈智ト訳ス」(同上)と注していて、英語 reason と独語 Vernunft を区別していること、そして現在なら「超越論的純粹理性」とでも訳すことばを「卓絶極微純全靈智」(33頁)と訳していることだけ指摘しておく。
- (25) 以上第一巻に関して、参考として、不十分を覚悟の上で、訳語対照表を付す。

原 語	致知啓蒙	現 行
ロジック、logic	致知、致知学、論科	論理学
subjective view	此観	
objective view	彼観	
ロゴス/レゲイン	語 <small>ゴトハ</small> /話す	
ロジカ	論弁ノ術	論理学
science of the laws of thought	思慮ノ法ノ學	思考法則の学
カテゴリー	靈 <small>クマコヨミ</small> 歴	カテゴリー、範疇
ロジック、プラクチック	實際致知	実践的論理学
Grammer	語科	文法
rhetoric	文科	修辞学
philosophy	哲学	哲学

原 語	致知啓蒙	現 行
Pure logic	單純致知	純粹論理学
applied logic	施用致知	応用論理学
Psychology or mental philosophy	性理ノ学	心理学
intuition	直覚、無媒諦	直覚、直観
conception	念	観(概)念
power of generalization	概括力	
quantity	度量観	量
notion	概念	観(概)念
quality	形質観	質
idea	想念	観念、思想
imagination	想像力	想像力
fancy	妄想	虚偽
a posterior	後天	後天(的)
a priori	先天	先天(的)
common name	通ヘル名	普通名
proper name	専ラニスル名	固有名
concrete	正サシキ形 ^{ナリ} ノアル者	具体
abstract	正サシキ形ナクシテ、其性質ノミラ、 指シタル想像上ノ物	抽象
mediate cognition or inference	有媒諦	媒介された認識、推理
discursive thought	弁證ノ考ヘ	推論的思考
thought	考ヘ、思慮、考	思考、思想
judgement	弁	判断
will	意思	
consideration	思量	
contemplation	思惟	
comparison	計較力	
conclusion	決、断言	結論
proposition	命題	命題
term	極	名辞
subject - object	主位—属位	主語—述語
copula	定言	繫辞、連辞

原 語	致知啓蒙	現 行
deduction	鉤引（ノ運用）、演繹	演繹
substance-attribute	実体—属性（質）	実体—属性
induction	套挿（ノ運用）、帰納	帰納
classification	彙類	分類
analysis-synthesis	分解法—綜合法	分析—総合
superordinate	上行	上位
subordinate	下行	下位
co-ordinate	同行	同位
genus, pl. genera	類	類
sing & pl. species	種	種
extension-comprehension	外延—内包	外延—内包
definition	定義	定義
indefinitive	泛称	
distributive	分称	
universal-particular	全称—特称	全称—特称
syllogism	演題	三段論法
individuel	一体	個体（物）
truism - self-evidence	真—自己明証	公理—自明性
identity - non-identity	同一—不同一	
consistence and non-consistence	可考 不可考	整合性 非整合性
assertion	定説	断言（定）
reason-intellect	理性—靈智	理性—知性
non-contradiction	莫逆嘉納	無—矛盾
axiom	單元	公理、律

- *1. 原語とは、『致知啓蒙』で引用されているもので、カタカナによる引用も含めた。
- *2. 箇所により同一語の訳語が異なる場合があるが一つにまとめた。
- *3. 現行とは、一般的に「論理学入門」の如きもので現在使用されているもので、それ以外は敢えて、空欄にした。
- *4. この他、原語を挙げていないが、訳語として考えられるもの（例えば、記号、形質言、文章科、文学言辞ノ学等）が多々あるが、省略した。